

で常識的に考えられぬ値になる。不幸にして採取された雨について滴の直径が測定されていないので実際に σ がどのくらいの数値になるか推定する事は困難であるが、これだけの結果からは、 σ はかなり1に近い値ではあるまいかと想像される。

放射能塵の正体がまだよく判っていないので上述のような洗滌作用の理論式が当を得ているかどうかについては疑問がある。恐らくは成層圏まで弥漫しているであろう人工放射能塵については、雨滴落下途上での洗滌作用のみならず、雲粒または雨滴生成層における捕捉作用を考慮しなくてはならぬのはもちろんである。雲粒または雨滴生成層においては降雨機構に關与する空気中の塵埃が水滴によって濾過されるようなモデルが考えられる。そこには新しい気塊の補給もあるであろう。先に掲げた第3図最下段の例のように、ある量の降雨があった後にもほぼ一定の放射能が降り終りまでつづくのは、上述のような雨滴生成層における放射能塵の捕捉によるものと

思われる。

8. 結 び

降りはじめからの雨水放射能の変化は気象学の問題として極めて興味が深いので今後さらに精細な観測を行ってみたい。集塵器による塵埃放射能の直接測定、および雨滴の直径の測定等を平行して行えばもう少し進んだ論議の資料となるであろう。

この試験観測に当り終始激励と御指導を賜わった観測部長川畑博士・大田測候課長・気象研究所三宅博士に厚く御礼を申し述べる次第である。

引用文献

- (1) 岡田武松著：雨。河出書房、P71
- (2) Y. Miyake and Y. Sugiura: The Mechanism of Dissolution of the Atmospheric Chloride into the Rain Water. Pap. Met. Geophys., 1, P222

した。

島山久尙(気象学会)、日高孝次(海洋学会)

菅原 健(防水学会)、佐々憲三(地震、火山学会)

安芸俊一(雪氷学会)、正野重方(気象学会)

気象学会の推薦委員候補は、全国理事会(11月18日)で無記名投票の結果、島山久尙、正野重方ときめられた。また、理事会(11月27日)が推薦委員候補の中から選挙した6名はつぎのとおりであった。島山久尙、正野重方、吉田順吾(雪氷学会)、菅原健、日高孝次、佐々憲三。

6. ハリケン、セミナーに久米庸孝氏を推薦

本年2月にドミニカでWMOドミニカ政府主催で行われるハリケン・セミナーに出席する人の推薦方を中央気象台長から照会された。常任理事会(12月14日)は、気象技術に明るい久米庸孝氏を推薦し、本学会の希望条件として、台風進路予想のための数値予報を紹介することを依頼した。また、台風に関し研究している笹原氏が米国に滞在中なので、このセミナーに出席できるよう尽力してもらうよう気象台長に希望した。

学 界 消 息

1. 新しい“天気”発足

定款の改正に伴って、機関誌としての“天気”が発足し、表紙第2頁のような顔ぶれの編集委員が11月1日から仕事を始めた。投稿規定は表紙第2頁にあるとおりで極めて自由、沢山の投稿が期待される。

2. 新定款書類を教育委員会に提出

定款改正に関する書類は、文部省その他との打合せを終って、いよいよ教育委員会に提出された。

3. 総会まで理事増加なし

定款改正に伴って理事が増員されるわけであるが、新理事投票のための事務と予算は大きいから、次回総会までは、増加すべき理事は欠員として、現在員で行うことに、11月18日の全国理事会で決定した。

4. 今年の総会

5月中旬に東京で開かれる予定。担当理事は神山、松本。

5. 昭和31年度文部省科学研究費等分科審議委員決定

地球物理学連合の各学会から2名が委員候補として推薦され、このようにして集まった候補者の中から、各学会が6名を選挙し、その結果、委員はつぎのように決定

講演会
お知らせ

2月16日9時、中央気象台において
特に気候、気象統計、季節予報に関する研究発表会
(なお都市気候について、シンポジウムがある。)
申込み期日 1月末日。